企画・制作
VIS-A-VIS
株式会社 岡山毎日広告社

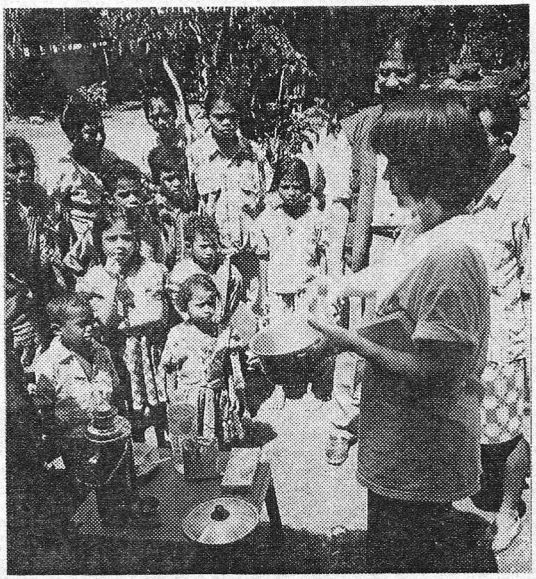
〈順不同〉

アムダリポート

国際NGO、カテゴリーII　UN,ECOSOC Consultative Status
AMDA
アムダ

西ティモールの難民キャンプで活動した鈴木剛史さん

インドネシアからの独立をめぐる混乱で、東ティモールから約26万人の難民が逃れた西ティモール地区。AMDAは昨年9月から12月まで同地区の難民キャンプに延べ20人のスタッフを派遣し、医療活動を展開してきた。しかし、現在も約10万人が西ティモールにとどまったまま。本部プログラムマネジャー、鈴木剛史さん（38）は4月10日から30日までインドネシア支部の医療チームらとともに現地入りした。「衛生状態が悪く、マラリアが流行していたし、東ティモールの正確な情報が伝わらず、将来の展望が見出せない不安感に包まれていた」とキャンプの様子を述べる。



粉ミルクのつくり方の指導を受ける難民ら

東京都出身で早大卒後、米国・ドゥルー大学の大学院で国際政治学を専攻。米国の証券会社に就職し、1988年に帰国、同社の東京支社に勤務した。その後、1年間休職し、NGOの一員としてカンボジアを訪れ、身障者向けの職業訓練施設の開設に力を尽くした。さらに「国際関係の分野で全力投球したい」と退職し、昨年9月からAMDAの一員として、東南アジアを中心とした地域のプロジェクトに携わっている。

今回、滞在したのは東ティモールとの境にほど近いウィニキャンプ場で、約1000人が避難生活をしている。ヤギやブタなどが放し飼いにされ、人の捨てた食べ残しがそのまま家畜のエサになっている。このため、衛生環境が悪く、マラリアが大発生。患者が次々と運び込まれ、医療チームは1日50～60人の治療に当たったという。

西ティモールの難民キャンプでの診察風景

また、難民はインドネシアからキャンプにとどまるか東ティモールに戻るかの二者択一を迫られており、「東ティモールは国連の管理下に置かれているが、独立反対派の民兵勢力も残っており、帰国すれば殺されるとか、女性はレイプされるなどの話が流れている。東ティモールの現状が正確に分からないため、帰国するかどうか決断できない難民が大多数」と訴える。

付近には各地でキャンプが設置され、「10万人の難民がすぐに戻れる状況ではなく、あと1、2年は混乱は続くだろう」と予想する。AMDAスタッフとしては初の海外派遣だったが、「2週間ぐらいいると、現地の住民と自然にあいさつが交わせる。救援する、救援されるの関係を超え、付き合えるようになると、仕事にも張りが出る」と話している。

このシリーズは今回で終了です。

難民キャンプの様子を話す鈴木さん